

〔解答・解説〕 1 説話に親しむ 宇治拾遺物語 小野の篁、広才のこと

内容の整理

- ①無悪善 ②小野篁 ③呪う ④小野篁 ⑤子

基本

- 1 (1)みかど (2)だいきり (3)おお(す) (4)たれ

【解説】(4)古文における「誰」は清音で読む。

- 2 (1)いらっしやる。(2)奏上する。申し上げる。

- (3)そういうわけだから。(4)天皇。主上。

- (5)おまえ。(6)何事もない。

3

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
おはす	おほ	せ	し	す	する	すれ	せよ
仰す	おほ	せ	せ	す	する	すれ	せよ
申す	まう	さ	し	す	す	せ	せ
奏す	そう	せ	し	す	する	すれ	せよ

【解説】「おはす」「奏す」はサ行変格活用。「奏す」は「漢語+す」から成る。「仰す」はサ行下二段活用、「申す」はサ行四段活用。

- 4 (1)ク (2)ウ (3)カ (4)オ (5)キ (6)ウ

【解説】(1)助動詞「たり」の連用形。ここは「書いてあつた」という意なので存続。(2)助動詞「らる」の連用形。帝が篁に「仰せられ」という意なので、尊敬。(3)直前の「な」は助動詞「ぬ」の未然形で、強意を表す。(4)「誰か書かむ」で、「誰が書くだろうか」の意。

「か」は反語を表し、「誰も書くはずがない」という意を込める。(5)「書いてあるようか」の意のは「と」という意味。(6)助動詞「す」の連用形。ここは「帝」が主語であり、「せ+給ふ」は「尊敬+尊敬」の最高敬語である。

- 5 申し上げられません。

【解説】「え」は副詞で、後に打消の語を伴って「…できない」という不可能を表す。「じ」は打消意志を表す助動詞で、「…ないつもりだ」の意。ここでは、読むことはできるが、恐れ多い内容なので申し上げられないし、申し上げるつもりもない、という意味合いが込められている。「候ふ」は丁寧の補助動詞で「…でございませう。…ます。」の意。

- 6 (1)か・む・連体(形) (2)こそ・つれ・已然(形)

【解説】「か」は反語、「こそ」は強意を表す。

読解

1 (1) B・ア (2) A・ア (3) C・ア

【解説】(1)「奏す」は、天皇または上皇に「申し上げる」時に用いる謙讓語。動作の受け手への敬意を表す。(2)「仰す」は、ここでは「言ふ」の尊敬語。動作の主体への敬意を表す。(3)「候ふ」は、動詞の連用形に接続しているので補助動詞。補助動詞の「候ふ」は丁寧語。この会話文は帝の問いかけに篁が答えたもので、会話の聞き手への敬意を表す。

なお、この文章における敬語はいずれも「帝」への敬意を表している。

2 立て札の内容が帝を呪うものだったので、帝の怒りを招くことを恐れたから。また、それを伝えることで自分に疑いがかかるのを恐れたから。

【解説】「恐れにて候へば」が直接的な理由である。まず、札に書かれた内容そのものが、「恐れ多い」ことであつたからと考えられる。また、「さればこそ、申し候はじとは申し候ひつれ。」「一一・二」ともあることから、篁は自分に疑いがかかることを想定していたことが分かる。

3 (1) 悪無くて善からむ

(2) 「嵯峨天皇がいなくてよいだろう」という意味。

【解説】「悪無くて善からむ」とは、「悪い性質がなくてよいだろう」の意だが、「悪」の「さが」という音に、「嵯峨」が掛けられており、「嵯峨無くて善からむ」という意が込められている。

4 ウ

【解説】帝は、自分を呪う意味が込められた立て札の内容に怒りを覚えるとともに、これほど手の込んだ呪いの文は高い学才がなければ書けないと考え、そうした学才の持ち主である篁を疑っている。

5 (1) イ

(2) 申し上げますまいと申し上げたのです。

【解説】(1)「されば」は接続詞、「こそ」は強意の係助詞で、「それだからこそ」の意。直前の帝の言葉を指している。(2)「申し候はじ」は、前に篁が述べた言葉「恐れにて候へば、え申し候はじ。」「二〇・六」を受けており、この部分を『でくくると理解しやすい。』立て札の文字を読むことはできません」と先ほど申し上げました、ということ。

6 子 子の子の子 子 子 子の子の子 子 子

【解説】「子」の訓読みは「こ」、音読みは「シ」。また、十二支の最初の「ね」を表す文字でもある。篁は「こ・し・ね」の音をうまく使い分けて読み、意味のある文にした。

7 篁が「無悪善」を読み解くことができたのは、それを書いた犯人だったからではなく、何でも読める高い学才の持ち主だったからだと判断したから。

【解説】帝が出題した「なぞ」を篁が簡単に読み解いたことから、これほどの学才があるのなら、誰が書いたか分からない立て札を読み解くことができるのも当然だと帝は考え、篁への疑いを解いた。